

# 長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報

2009年3月

大阪大学文学研究科考古学研究室



西クビレ部 2008 調査区 (前方部よりのぞむ)

# 長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報

2009年3月

大阪大学文学研究科考古学研究室

## 例 言

- 1 本書は兵庫県宝塚市山手台東1丁目4-424(旧宝塚市切畑字長尾山)に所在する長尾山古墳の調査概要をまとめたものであり、『長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報』(宝塚市教育委員会が2009年3月刊)の別刷である。
- 2 本書には、科学研究費補助金による研究の一環として大阪大学考古学研究室が実施した墳頂部の調査(第3次調査)と、墳丘の基本的な情報を得るために国費、県費の補助を受けて宝塚市教育委員会が実施した墳丘調査(第2次調査)の成果概要を収載している。
- 3 第3次調査は大阪大学文学研究科教授福永伸哉、同准教授高橋照彦、同助教寺前直人が担当した。調査の実施にあたっては、宝塚市教育委員会から多大なご協力をいただいた。第2次調査は宝塚市教育委員会社会教育課長直宮憲一、同主任吉田健一が担当し、福永、高橋、寺前が調査指導にかかわった。現地調査の期間は2008年8月27日～9月28日の約1ヶ月間である。
- 4 出土資料の整理分析および本書の作成作業は、宝塚市教育委員会と大阪大学が連携しながら、大阪大学考古学研究室において行った。
- 5 現地調査、資料整理分析作業には大阪大学大学院生、学生が参加した。参加者名は第1章に記す。写真撮影は、遺構を寺前、福永、遺物を寺前が担当した。製図の分担は挿図目次に示した。
- 6 本書におけるレベル高はすべて海拔を表し、北方位は座標北を示す。
- 7 本書作成の過程でトレンチ名称を整理したため、2008年9月に開催した現地説明会における配付資料のそれと異なる部分がある。
- 8 本書の執筆は福永、寺前、直宮のほか、大阪大学文学研究科博士後期課程中久保辰夫、同前期課程酒井将史、前田俊雄、野島智実、金澤雄太、森暢郎が分担して行い、担当箇所は目次および執筆箇所の末尾に記した。編集は調査参加者の協力を得て福永が担当した。



遺跡位置図



# 長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報

## 目 次

巻頭図版

例 言

第1章 調査経過	1
1 周辺の古墳	中久保辰夫 …… 1
2 調査経過	福永伸哉・直宮憲一 …… 3
第2章 調査成果	6
1 墳丘の現状と既往の調査成果	野島 智実 …… 6
2 発掘調査の成果	8
(1) トレンチの配置	寺前 直人 …… 8
(2) 前方部 2008 - 1 トレンチ	酒井 将史 …… 8
(3) 西クビレ部 2008 調査区	前田 俊雄 …… 9
(4) 前方部 2008 - 2 トレンチ	森 暢郎 …… 9
(5) 後円部 2008 - 1 トレンチ	中久保 …… 10
(6) 墳頂部調査区	中久保 …… 10
(7) 墳丘形態の復元	寺前 …… 13
第3章 出土遺物	金澤 雄太 …… 15
第4章 調査のまとめ	福永・直宮 …… 17
図 版	

## 図 版 目 次

巻頭図版 西クビレ部 2008 調査区 (前方部よりのぞむ)

図版 1

- 1 長尾山古墳の立地 (中央山塊頂部、南から)
- 2 前方部前面付近の現状 (東から)

図版 2

- 1 前方部 2008 - 1 トレンチ全景 (南東から)
- 2 同 (南から)

図版 3

- 1 西クビレ部 2008 調査区全景 (東から)
- 2 同 (南から)

図版 4

- 1 西クビレ部 2008 調査区全景 (南東から)
- 2 西クビレ部 2008 調査区における埴輪列検出状況 (東から)

図版 5

- 1 前方部 2008 - 2 トレンチ全景 (北から)
- 2 前方部 2008 - 2 トレンチ 2 段目葺石 (北から)
- 3 同 (北西から)

図版 6

- 1 後円部 2008 - 1 トレンチ全景 (東から)
- 2 後円部 2008 - 1 トレンチ 1 段目葺石と埴輪 (東から)
- 3 同 (東から)

図版 7

- 1 埴輪 (口縁部・頸部) 外面
- 2 埴輪 (胴部・底部) 外面

図版 8

- 1 埴輪 (口縁部・頸部) 内面
- 2 埴輪 (胴部・底部) 内面

## 挿 図 目 次

遺跡位置図 (金澤製図) .....	iii
図 1 周辺の古墳分布図 (中久保製図) .....	2
図 2 長尾山古墳の位置 (森製図) .....	3
図 3 調査のひとこま .....	4
図 4 1969 年の墳丘図 (『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第 1 集より) .....	6
図 5 長尾山古墳の墳丘測量図と調査区配置 (中久保製図) .....	7
図 6 調査前の前方部 2008 - 2 トレンチ地点 .....	10
図 7 調査前の後円部 2008 - 1 トレンチ地点 .....	10
図 8 西クビレ部 2008 調査区 平面・立面・土層断面図 (酒井製図) .....	11 ~ 12
図 9 墳丘形態の復元 (中久保製図) .....	14
図 10 出土埴輪実測図 (金澤製図) .....	15

# 第1章 調査経過

## 1 周辺の古墳

長尾山古墳が所在する北摂西部地域は、現在の兵庫県東南部と大阪府北西部にまたがり、北部に北摂山地が、南部は大阪湾に面する西摂平野が広がる。平野の西側には武庫川が、中部には猪名川が南流し、この流域には数多くの古墳が築造されている（図1）。ここでは武庫川と猪名川にはさまれた長尾山丘陵を中心に、周辺の古墳を時期ごとに概観したい。

古墳時代前期には、おおむね前期後葉から北摂地域各地に古墳の築造が認められると考えられてきた。丘陵に目を向けると、長尾山丘陵に宝塚市長尾山古墳（1）、同万籟山古墳（前方後円/54 m：2）が築かれ、池田市域にあたる五月山丘陵には池田茶白山古墳（前方後円/62 m：26）、娛三堂古墳（円/27 m：22）が、待兼山丘陵にも豊中市待兼山古墳（前方後円？/不明：44）と同麻田御神山古墳（前方後円？/不明：50）が築造される。同様に、台地上や平野部においても、豊中台地には桜塚古墳群のうち大石塚古墳（前方後円/76 m：56）、小石塚古墳（前方後円/49 m：57）、嫁廻塚古墳（円/30 m：68）が、武庫川左岸平野部には宝塚市安倉高塚古墳（円？/不明：13）が、伊丹市から尼崎市にかけての猪名川中流域平野部には猪名野古墳群のうち上臈塚古墳（前方後円/70 m？：79）、池田山古墳（前方後円/71 m：88）などの古墳が築かれる。

このように、各地に前期前方後円墳の築造が認められるが、今回の調査が始まる以前は長尾山古墳のみが前方後方墳の可能性が高いと考えられてきた。また、その所属時期に関しても、前期後葉とする説（櫃本 1971、森岡・吉村 1992、福永 2004）と中期初頭に位置づける説（橋本 1975）があり、評価が定まっていなかった。

古墳時代中期には、前期と一転して、前方後円墳や大型円墳といった有力古墳の築造は、豊中台地における桜塚古墳群や猪名川中流域の猪名野古墳群に限られるようになる。桜塚古墳群では、豊中大塚古墳（円/56 m：61）、御獅子塚古墳（前方後円/55 m：62）、狐塚古墳（前方後円/不明：64）、北天平塚古墳（前方後円/30～35 m：65）、南天平塚古墳（円/20 m：66）の順に連綿と有力古墳が築造されている。同様に、猪名野古墳群においても中期には御願塚古墳（前方後円/52 m：84）、御園古墳（前方後円/60 m：90）、南清水古墳（前方後円/46 m：86）が築かれている。こうした築造状況の中、長尾山丘陵において長尾山古墳が中期に築造されているとすれば、桜塚古墳群や猪名野古墳群との関係を検討する必要がある。そのため、この地域の首長墳系列を考えるうえで、長尾山古墳の時期的な位置づけが問題となるのである。

古墳時代後期になると桜塚古墳群が衰退する一方、それまでしばらく有力古墳の築造がみられなかった長尾山丘陵や五月山丘陵にふたたび前方後円墳があらわれる。長尾山丘陵においては、後期前半に川西市勝福寺古墳（前方後円/41 m：16）が出現し、後期後半には、雲雀丘古墳群（12）など丘陵斜面の尾根沿いに約 200 基以上から成る群集墳が形成される。五月山丘陵南麓では横穴式石室 2 基を

# 1 周辺の古墳



国土地理院発行5万分の1地形図(「広根」[大阪西北部])を使用

- |              |              |                  |              |                |
|--------------|--------------|------------------|--------------|----------------|
| 1 長尾山古墳      | 20 木部桃山遺跡    | 39 新稲古墳          | 57 小石塚古墳     | 76 田能遺跡第2号     |
| 2 万籟山古墳      | 21 紅葉古墳      | 40 桜古墳           | 58 桜塚古墳      | 77 緑ヶ丘古墳群      |
| 3 中山荘園古墳     | 22 娛三堂古墳     | 41 中尾塚古墳         | 59 荒神塚古墳     | 78 荒牧古墳        |
| 4 中山寺白鳥塚古墳   | 23 娛三堂南古墳    | 42 稲荷社古墳         | 60 小塚古墳      | 猪名野古墳群(79-91)  |
| 5 中筋山手古墳群    | 24 城山古墳      | 43 太鼓塚古墳群        | 61 豊中大塚古墳    | 79 上臈塚古墳跡      |
| 6 中筋山手東古墳群   | 25 池田城下層     | 44 待兼山古墳         | 62 御獅子塚古墳    | 80 有岡城遺跡(204次) |
| 7 山本古墳群      | 26 池田茶白山古墳   | 45 待兼山2号墳        | 63 出雲塚古墳     | 81 鶴塚砦古墳跡      |
| 8 山本奥古墳群     | 27 五月ヶ丘古墳    | 46 待兼山3号墳        | 64 狐塚古墳      | 82 南本町遺跡古墳群    |
| 9 平井古墳群      | 28 宇保稲津彦神社古墳 | 47 待兼山4号墳        | 65 北天平塚古墳    | 83 猪名寺廃寺       |
| 10 雲雀丘西尾根古墳群 | 29 脇塚古墳      | 48 待兼山5号墳        | 66 南天平塚古墳    | 84 御願塚古墳       |
| 11 雲雀丘東尾根古墳群 | 30 鉢塚古墳      | 49 石塚古墳          | 67 女塚古墳      | 85 園田大塚山古墳     |
| 12 雲雀丘古墳群    | 31 二子塚古墳     | 50 麻田御神山古墳       | 68 嫁廻塚古墳     | 86 南清水古墳       |
| 13 安倉高塚古墳    | 32 善海1号墳     | 51 金寺山廃寺(1次)     | 69 桜塚38号墳    | 87 食満塚古墳       |
| 14 豆坂古墳群     | 33 善海2号墳     | 52 新免宮山古墳群       | 70 桜塚39号墳    | 88 池田山古墳       |
| 15 萩原古墳群     | 34 野田塚古墳     | 53 新免古墳群         | 71 桜塚42号墳    | 89 柏木古墳        |
| 16 勝福寺古墳     | 35 狐塚古墳      | 54 山ノ上遺跡(10・14次) | 72 桜塚43号墳    | 90 御園古墳        |
| 17 小戸遺跡      | 36 石橋古墳      | 桜塚古墳群(55-73)     | 73 桜塚44号墳    | 91 伊居太古墳(非古墳?) |
| 18 木部1号墳     | 37 宮ノ前古墳群    | 55 御位塚古墳         | 74 利倉南遺跡(1次) |                |
| 19 木部2号墳     | 38 豊島南遺跡     | 56 大石塚古墳         | 75 田能遺跡第1号   |                |

図1 周辺の古墳分布図

内包する二子塚古墳(前方後円/45m:31)が後期前半に築造され、後期後半には大型横穴式石室を有する鉢塚古墳(円/45m:30)がつづく。古墳時代終末期においては、各地における古墳築造が終焉を迎えていく中で、長尾山丘陵には刳抜式家形石棺を持つ中山寺白鳥塚古墳(不明/不明:4)や八角形の墳丘プランを呈する国史跡の中山荘園古墳(八角/14m:3)が築造される。



以上のように、北摂西部地域における古墳の築造状況には、時期によって小地域ごとに特徴的な変化が認められ、古墳の時期や墳形、規模は当地域における有力者の政治的な動向を考える上で重要な情報となる（福永 2004）。  
（中久保辰夫）

## 2 調査経過

長尾山古墳は、1957年に石野博信氏と関西学院大学考古学研究会メンバーによる長尾山丘陵の分布調査で「発見」され、はじめて学界にその存在が知られることになった（石野 1986）。その後、1969年には櫃本誠一氏の指導のもとに宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会によって墳丘測量調査が行われ、前期の前方後方墳である可能性が指摘された（櫃本 1971）。当古墳から北東1kmの地点には、学史的にも著名な摂津万籟山古墳が存在しており、それとの関係も注目された。

この長尾山丘陵では1970年代ごろから大規模な宅地造成の計画が進んだ。宝塚市では一部の後期古墳群については、奈良大学などの応援を得て開発に先立つ事前調査を実施するなどの対応をはかっていたが（森本 1992）、長尾山古墳は有力首長古墳としての特段の重要性にかんがみ、1992年に古墳が位置する尾根を取り込む形で都市公園を設けることにより、現状のまま保存することとなった。

その後1990年代後半には、経済環境の変化もあって一時宅地造成のペースは鈍化したが、2000年頃からふたたび開発の動きが活発になるにつれて、古墳周辺を散策する市民も増え、古墳の範囲確認、墳丘の保護、文化財としての周知などが、対応を要する現実的な課題として浮上してきた。

いっぽう、2000年から猪名川流域をフィールドとして古墳時代史の研究を進めてきた大阪大学考



図2 長尾山古墳の位置



#### 4 調査経過

古学研究室は、長尾山古墳の実態解明が地域の首長系譜分析にとって重要な課題であると位置づけ、2007年にこの古墳に対するはじめての発掘調査を行った。その結果、長尾山古墳が葺石、埴輪を持つ前期前半の古墳で、墳形も前方後円墳である可能性が非常に高いことがわかり、この古墳の重要性

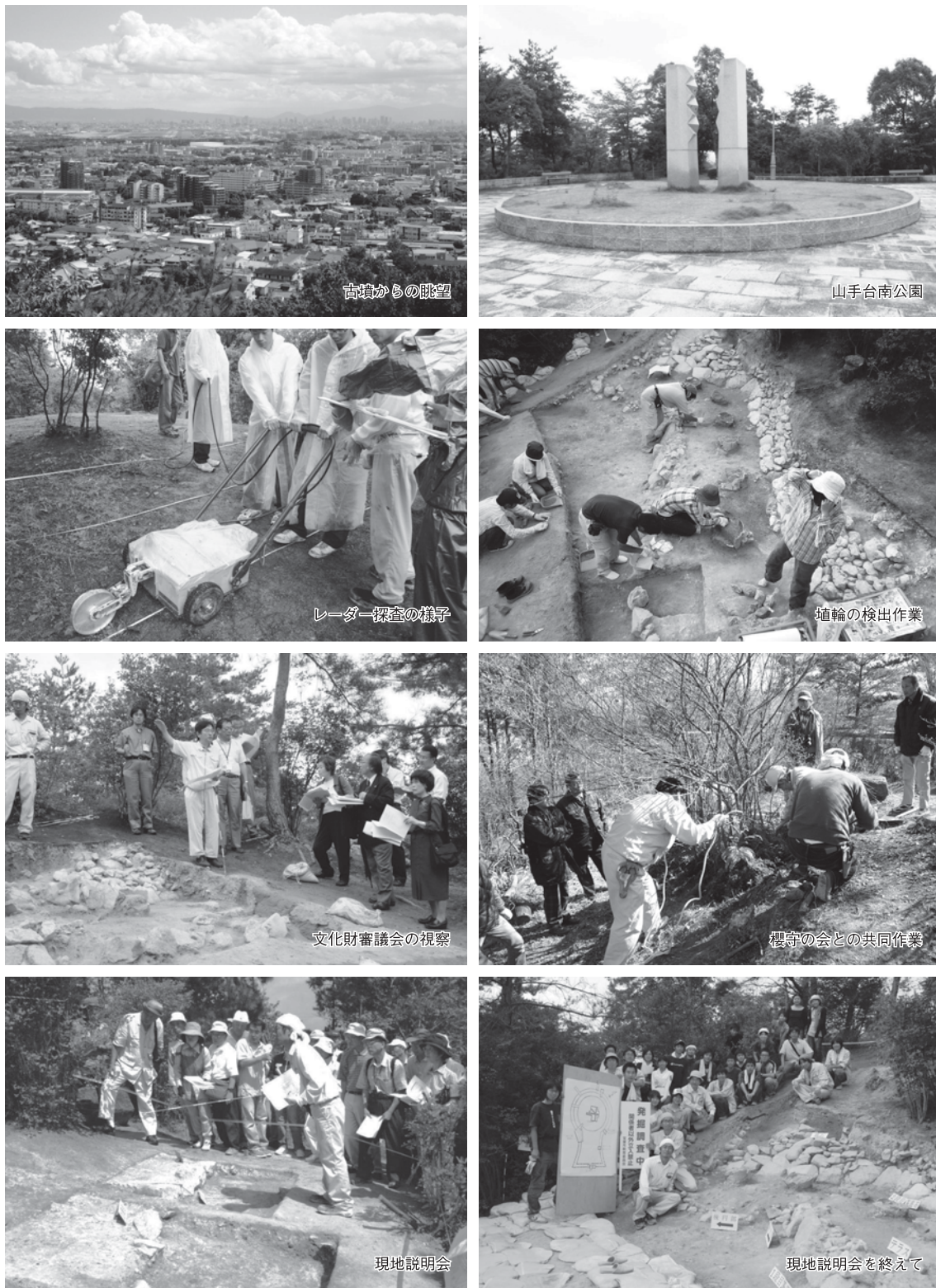


図3 調査のひとこま

をあらためて認識させることとなった（福永編 2008）。

以上のような状況をうけて、宝塚市教育委員会では長尾山古墳の範囲、築造時期、墳形などの確認が文化財行政のうえからも不可欠と考え、国費、県費の補助を受けて今回の発掘調査を計画した。大阪大学においても、新たに科学研究費補助金（課題名：古墳時代政権交替論の考古学的再検討、研究代表者：文学研究科教授福永伸哉）を獲得して、学術面から長尾山古墳の解明を継続することになり、おもに墳頂部を中心として発掘調査を行うこととした。

市教委、阪大の調査は 2008 年 8 月～9 月にかけてほぼ同時期に実施された。埋蔵文化財行政としての調査と大学による研究目的の調査が並行する形になったが、双方は密接な協力の下に共同調査としてのメリットが生かせるようにはかった。なお、調査次数の呼称としては、今回の市教委主体のものを第 2 次、阪大主体のものを第 3 次、さらに 2007 年に阪大が行った調査を第 1 次としている。

市教委による第 2 次調査は、墳丘各所にトレンチを入れる方法で古墳の規模、墳形、埴輪列の状況などを検討した。とりわけ、西クビレ部では前方部から後円部に連続する基底石の並びが良好な状態で検出され、これにより本墳が前方後円墳であることが確実となった。阪大による第 3 次調査では、墳頂部で木棺の陥没による可能性がある小礫混じりの窪みと、墓坑掘形の可能性がある土の違いを確認したが、樹木の関係で調査範囲が限られたため、それらの性格の解明は次年度以降の課題とされた。9 月 18 日に記者発表、23 日に現地説明会をいずれも共同で実施し、現地説明会には約 250 名の参加を得るなど、市民の関心の高さがうかがわれた。この間、9 月 19 日には宝塚市文化財審議会の現地視察があった。なお、約 1 ヶ月間にわたった現地調査の進行状況は、大阪大学によって毎日インターネットのサイトで公開され、閲覧した市民が現地説明会に参加されるなど、周知効果を得ることができた。9 月末に現地調査を終了した後は、大阪大学考古学研究室において出土資料や記録の整理を進め、本概要報告書の作成を行った。

第 2 次、第 3 次の現地調査及び資料整理作業の参加者は次の通りである。

奥村茂輝、中久保辰夫（文学研究科博士後期課程）、酒井将史、前田俊雄、野島智実、金澤雄太、森暢郎（文学研究科博士前期課程）、大川沙織、岡本晋輔、露原有紗、古谷暢也、川村奈央子、島田翔、高松由、平木優吾、仲辻慧大、向川侑大、山中良平、上地舞、北原梨江、城内龍一、藤城光、後藤俊介、橘泉（文学部）、横地勲（文学部科目等履修生）、下村健吾、安田智一（理学部）、齊藤啓子（神戸女学院大学）、嶋圭太（高知大学）。

調査の実施にあたっては、兵庫県教育委員会から全般的な指導をいただいたほか、来訪された多数の専門研究者からも有益な教示を賜った。地元の山手台東自治会、里山整備活動グループ「櫻守の会」、阪急不動産株式会社山手台開発事業部からは、円滑な調査の実施にかんしてご理解とご協力を得た。また、調査団の宿舎となった宝塚市小浜では小浜自治会のお世話になった。このほかにも、多くの方々を支えられて調査を無事終了できたことを記し、感謝の意を表したい。（福永伸哉・直宮憲一）



## 第2章 調査成果

### 1 墳丘の現状と既往の調査成果

長尾山古墳は、西摂平野を見下ろす長尾山丘陵の南側斜面尾根上に所在する。近年、周囲の宅地化が急速に進み、現在、古墳は宝塚市山手台東1丁目にある山手台南公園の一角にとりつく形となっている。墳丘やその周辺の樹木は市民グループ「櫻守の会」に手入れされ、四季折々の景観を呈する。墳丘の状態としてはまず、北西部に丘陵下から公園へ登る道や排水溝が敷設されている。また丘陵尾根を南東方向へ少し下った平坦地には東屋が設置され、墳丘裾東側を通る遊歩道が東屋と公園を結ぶ。遊歩道よりも東側は急勾配の崖となり、深い茂みに覆われている。

長尾山古墳のこれまでの調査として、はじめに1969年に行われた宝塚市教育委員会と夙川学院短期大学日本歴史研究会による測量調査がある(図4)。その成果は調査を指導した櫃本誠一氏によって1971年に報告された(櫃本1971)。氏は測量調査を通じて、長尾山古墳は墳長36mの前方後方墳であると想定した。またこの時点では、後方部において粘土礫が露出していると述べられている。

その後、2007年には大阪大学考古学研究室が測量調査、および墳形確認のための発掘調査を行った(福永編2008)。

この測量調査では、1971年報告の段階から、古墳の形状自体は大きく変わっていないことが確認された。(図5)。しかし、東西のクビレ部に相当する辺りから北へのびる等高線が、標高116.5m付

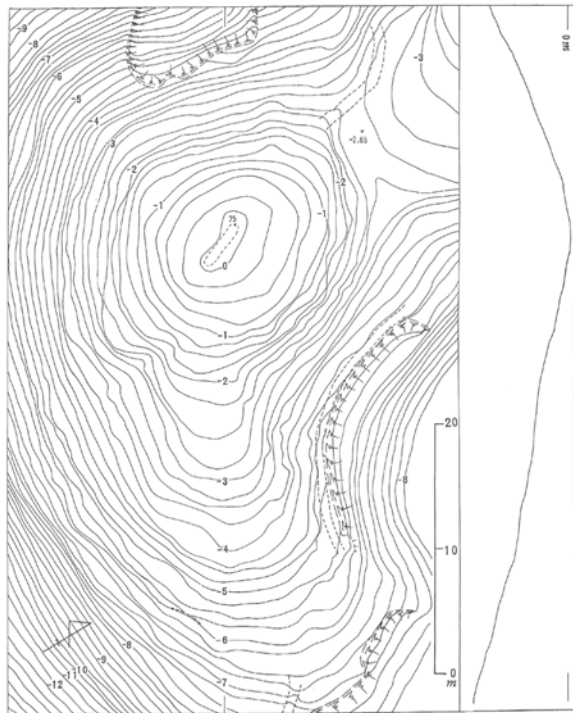


図4 1969年の墳丘図  
(『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集より)

近から119.0mにかけて、緩やかな弧状を描いている様子が窺われた。特に西側は樹木も少なく、墳丘の残存状況は比較的良いと予想された。また南北方向にかんしては、古墳の規模しだいでは東屋や排水溝によって墳丘が削平を受けている事態も想定された。しかしその一方で、前方部側では標高116.3m付近に石列が露出している部分もあり、これが墳端を示している可能性も考えられた。そこで、墳形ならびに墳丘規模確認のために7ヶ所の調査区を設け、発掘調査を行った。その結果、後方部では墳丘基底部の最終的な確定は困難であったが、一部、葺石に由来すると思われる礫群が検出された。墳丘南東部の前方部前面側では墳丘土の流失が激しかったものの、一部地表に露出していた石列が、前方部前端の葺石基底石列と判断された。さらに西クビレ部の2つの調査区に



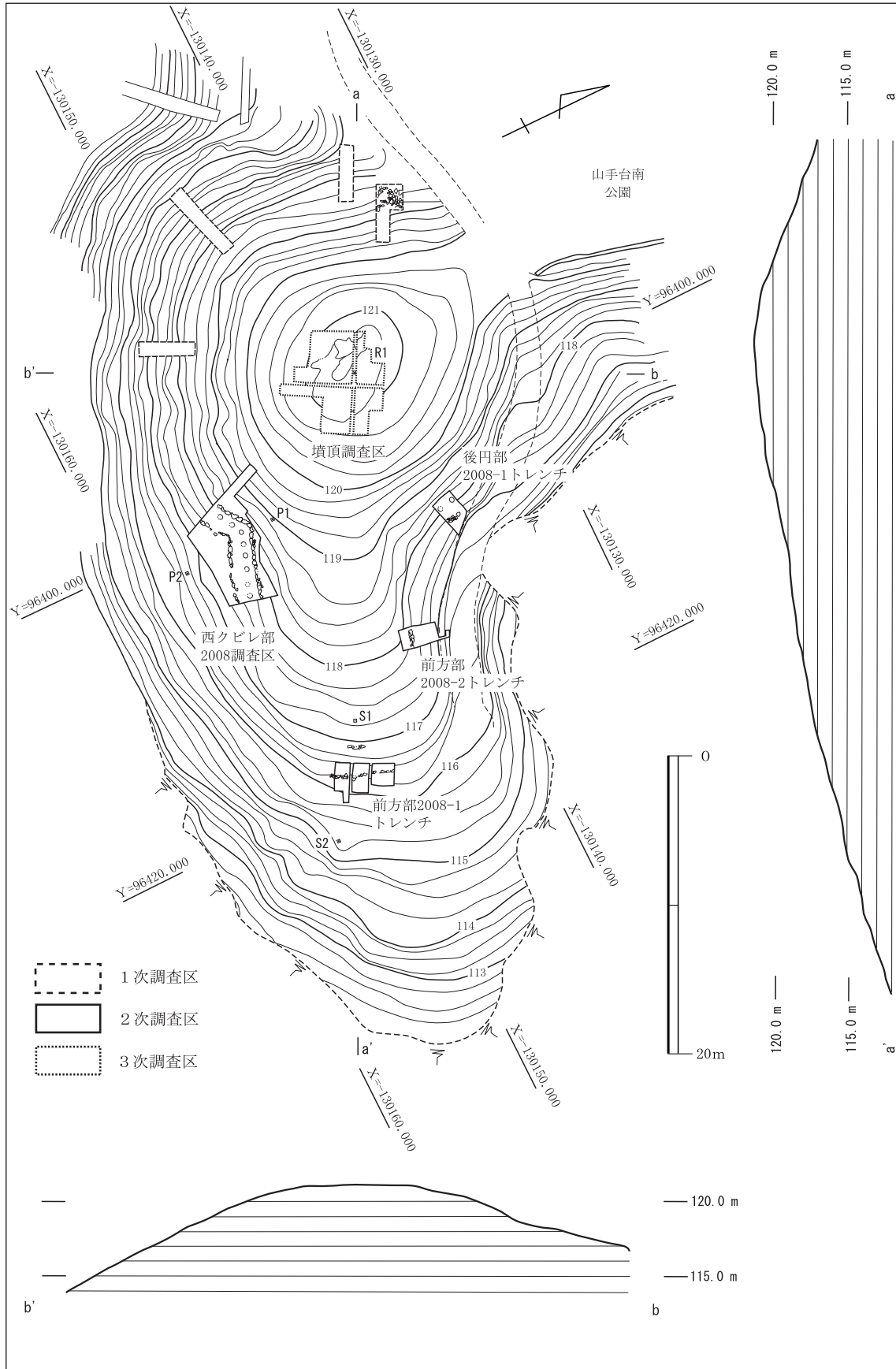


図5 長尾山古墳の墳丘測量図と調査区配置

## 8 発掘調査の成果

において、原位置を保つと考えられる葺石基底石と、樹立状態の埴輪を検出した。基底石の並びが弧線を描くことや、墳丘主軸に対して鈍角に延びていくことなどから、長尾山古墳は前方後円墳である可能性が非常に高くなった。後円部の後端部は遺構としてとらえてはいないが、復元径で考えると墳丘長は39mと推定された。

しかし、比較的残りがよかった西クビレ部も面的な発掘調査ではなかったため、クビレの屈曲部そのものをとらえることはできておらず、墳丘の東半部の構造についても、情報が得られていない。また1971年に報告されている粘土槨の露出は、2007年の調査では確認できなかった。墳頂部には測量用のコンクリート杭が埋設されており、遺存状態も含めて、埋葬施設の残存状況の確認も今後の課題として残された。  
(野島智実)

## 2 発掘調査の成果

### (1) トレンチの配置

今回の発掘調査では、次の3つの目的に基づき、おおきく3ヶ所に調査区を配置した(図5)。

まず、昨年度の第1次調査における西クビレ部第1、第2トレンチそれぞれで検出された葺石基底石列ならびに埴輪が樹立されたテラスの面的な検出を目的として、西クビレ部2008調査区を設定した。当調査区は昨年度の2つのトレンチをつなぐかたちで、東西約6m、南北約4mの範囲を掘削した。さらに3段目テラスの有無を確認するために調査区西側では墳丘上方へ約2.3mの拡張を実施している。

次に第1次調査では調査区を設定しなかった北東側の墳丘構造の解明を目的として、前方部2008-2トレンチと後円部2008-1トレンチを設定した。両トレンチとも想定墳裾ラインに直交する方向に長さ約4m、幅約1.5mの範囲を掘削した。

さらに前方部前面に対しても、昨年度の前方部第1トレンチで検出された葺石基底石列の走行方向を確定させるために、前方部2008-1トレンチを設定した。当トレンチは、昨年度調査区を北東側に約3m拡張するかたちで設定している。

なお、前述の目的で着手された第2次調査と並行して、大阪大学考古学研究室が後円部墳頂における埋葬施設の残存状況を確認する目的で、約7m四方の調査区を設定し、調査を進めた。その成果についてもあわせて報告する。  
(寺前直人)

### (2) 前方部2008-1トレンチ(図版2)

前方部2008-1トレンチは、前方部前端のラインと構造を明らかにすることを目的に設定したトレンチである。第1次調査では、前方部の1段目の基底石を検出し墳裾の位置を確認したため、本調査では、その並びをさらに追求する目的で、第1次調査で検出した基底石から北東方向に長さ4m、幅1.5mのトレンチを設定した。

調査の結果、約4.4mにわたって基底石の連なりを検出した。これによって前方部前端のラインは昨年度想定したものよりもやや北側に振れることが判明した。部分的に葺石のラインが乱れる箇所が

存在するが、これらは土圧や流水などにより葺石が移動したものと考えられる。また、トレンチ内の南西端の基底石下端の標高は約 116.0 m、北東端のそれは標高約 116.2 m であり、約 0.2 m 北東側が高く築かれている。葺石は 1～3 石現存していたが、第 1 次調査で確認した 2 段目基底石との比高差は 0.7～0.9 m であるため、西クビレ部の所見を参考にすると本来はあと数石積み、テラス面を形成していたと推測される。(酒井将史)

### (3) 西クビレ部 2008 調査区 (図 8、図版 3・4)

西クビレ部 2008 調査区は、墳丘形態および葺石や埴輪列といった外表施設の詳細な情報を得るために設定した。本年度の調査区は昨年度に設定した西クビレ部第 1 トレンチおよび第 2 トレンチをつなぐかたちで設定し、また調査区の西側ではさらに墳丘上方へ長さ 2.3 m、幅 0.6 m の拡張を行った。

調査の結果、1 段目および 2 段目の葺石と埴輪列を良好な状態で検出することができた。まず 1 段目の葺石は、基底石下端レベルは後円部側では標高 117.15 m、前方部側では標高 117.0 m で後円部から前方部へとなだらかに標高がさがっている。次に述べる 2 段目葺石の基底石下端レベルなどを参考にすると、墳丘 1 段目は 0.3 m 程度の低いものとなる。1 段目葺石は 1 石、あるいは 2 石程度が積み重ねられていたと考えられる。

2 段目の斜面の葺石は 1 段目と比較するとかなり良好な状態で検出することができた。基底石には最大で長径約 50cm と比較的大きな石が用いられており、基底石下端レベルは後円部側では標高 117.5 m、前方部側では標高 117.4 m で 1 段目葺石と同様、後円部から前方部へとなだらかに標高がさがっている。2 段目葺石は傾斜角約 45 度で、調査区内では標高 118.3 m まで残存している。なお葺石の葺き方は石材の組み合い方からみて、後円部側から前方部側へと葺かれていったことがわかる。

1 段目葺石と 2 段目葺石のあいだには幅 1 m の平坦面を確認した。この平坦面ではほぼ原位置を保っていると考えられる埴輪列が検出されており、1 段目のテラス面にあたりと考えられる。

調査区内の埴輪列では昨年度にとりあげた 1 本を含めて、計 8 本の樹立状態の円筒埴輪を確認することができた。円筒埴輪は底部径が最大でおよそ 40cm で、2 段目葺石の基底石から南に、後円部側およびクビレ部付近ではおよそ 0.3 m の位置に、前方部側では 0.5～0.7 m の位置に樹立している。樹立間隔は中心間の距離で約 1 m であるが、クビレ部の屈曲点付近では間隔がやや狭まり、0.75 m となっている。後述する後円部 2008 - 1 トレンチと同様に、樹立埴輪の掘形は認められなかった。

また、この調査区では 2 段目のテラスおよび 3 段目葺石の有無を確かめるために、調査区の西端で墳丘上方へ長さ 2.3 m、幅 0.6 m の拡張をおこなった。この拡張区ではほかの場所でみられた大量の葺石の転落石が検出されることもなく、テラス面や葺石を検出することはできなかった。しかし、標高 118.5 m 付近に人為的に平坦面を作り出したとも考えられる場所を確認することができた。この場所は 2 段目のテラスの痕跡を反映していることも考えられる。もしそうであれば、長尾山古墳の後円部は三段築成であったことになる。この点については次年度以降の調査で明らかにしていく必要がある。(前田俊雄)

### (4) 前方部 2008 - 2 トレンチ (図 6、図版 5)

前方部 2008 - 2 トレンチは、前方部東側の墳丘残存状況を明らかにするために設定した。墳丘の

## 10 発掘調査の成果

遺存範囲を確認するための拡張区を含めて、調査区は長さ 3.3m、幅 1.5m の範囲におさまる。

調査の結果、墳丘 2 段目斜面の葺石およびテラス面を検出した。トレンチの南端から北へ約 0.8m の箇所に、トレンチを横切る形で組み合った状態の礫群を検出した。検出状況からこの礫群を葺石と判断した。基底石には長径約 40cm の石が用いられ、上部にはそれより小さな石が用いられている。基底石下端の高さは標高 117.3m 付近である。葺石は墳丘上方に向かって 3 石程度残存している。

葺石の北側では幅約 0.9m の平坦面が検出された。平坦面上からは、二次的に移動しているものの、埴輪片がまとまって出土しており、この部分が墳丘 1 段目のテラス面になると考えられる。また、土層観察の結果、少なくともテラス面より上方は盛土で墳丘を築いている可能性が高く、葺石は裏込め土を施しながら設置していることが判明した。 (森 暢郎)

### (5) 後円部 2008 - 1 トレンチ (図 7、図版 6)

後円部 2008 - 1 トレンチは後円部東側の墳丘残存状況を確認するために設置し、拡張区を含めると、長さ約 3.3 m、幅 1.5 m の範囲となった。第 1 次調査においては公園からのびる遊歩道によって東側の墳丘は大きく削平されていると考えていたが、今回調査を行ったことにより墳丘が良好な状態で保たれていることが判明した。

調査の結果、1 段目の基底石と 1 段目テラス上に樹立された 2 本の円筒埴輪底部を検出した。まず、1 段目の基底石は標高 117.4 m 付近に据えられており、長径 25 ~ 30cm の角礫が 3 石残存していた。基底石の上には長径 15cm 程度の礫が葺かれた状態で残存している。また、土層観察の結果、墳丘は 1 段目の基底石の高さより盛土によって築造した可能性が高いと考えられる。埴輪には掘形が認められず、樹立した後に厚さ 5 cm の「化粧土」を敷いて固定されていることが明らかとなった。2 本の埴輪は標高 117.66 ~ 70 m で検出され、出土状況から原位置を保っている可能性が高い。底部しか残存しておらず、中心間距離は 1.0m である。

2 段目の葺石にかんしては、樹木保護のため今年度のトレンチでは検出することができなかった。2 段目、3 段目の墳丘残存状況については来年度における調査の課題として残っている。 (中久保)

### (6) 墳頂部調査区

長尾山古墳の墳頂部には、コンクリート杭とその枠が埋設されており、埋葬施設が破壊されている恐れがあった。そこで大阪大学考古学研究室がおこなった第 3 次調査においては、埋葬施設の残存状



図 6 調査前の前方部 2008 - 2 トレンチ地点



図 7 調査前の後円部 2008 - 1 トレンチ地点



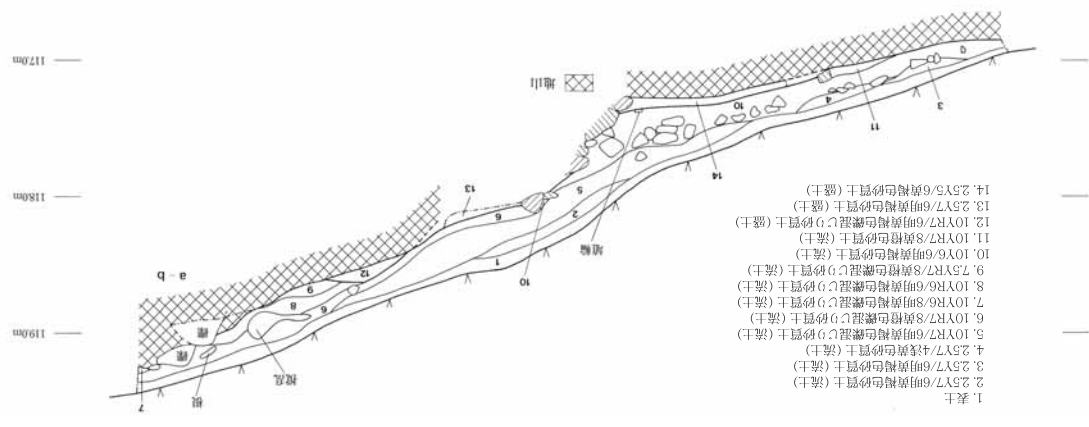


図8 西クビレ部2008調査区 平面・立面・土層断面図

況を確かめるために調査区を設定した。

発掘調査に先立ち、長さ10 m、幅6 mの範囲で電気探査を、長さ11 m、幅12 mの範囲でレーダー探査を行った。その結果、墳丘主軸に斜交する南北方向に周囲とは異なる反応を得ることができ、埋葬施設を反映している可能性も考えられた。

上記の探査結果をふまえ、まず、長さ3 m、幅4 mの調査区を設定し、幅20cmの十字アゼを残しつつ、必要に応じて拡張区を設けながら掘削を進めた。その結果、以下の諸点が明らかとなった。

まず、調査区中央の長さ5.5 m以上、幅約3.6 mの範囲に土質の異なる部分を検出した。現状では墓坑である可能性が高いと考えているが、盛土の土質差である可能性も残る。第2点目として、長さ4.5 m以上、幅1.6 mの範囲に丸みをおびている小礫群が南北方向に認められた。この小礫群については不明な点が多いものの、築造当初に墳頂部に円礫が敷かれていた状況を想定すると、それが木棺などが陥没したのちに落ち込んで堆積した可能性がある。今回の調査では樹木保護のため、墓坑と同様、平面的に全形を確認することができなかった。このほか、調査区北西には盗掘坑の可能性のある土質の違いを検出している。なお、上述したコンクリート杭は、この小礫群の分布範囲からはやや外れており、一部周囲を掘り下げた所見によると、さほど根入れの深いものではなさそうである。

以上のような遺構が確認できたものの、調査範囲の制約などからその性格や埋葬施設の現状については不明な点が多く残されている。来年度以降の課題である。 (中久保)

#### (7) 墳丘形態の復元 (図9)

すでに第1次調査の成果に基づき、長尾山古墳を墳長39 m、後円部径26 m、前方部長13 mの前方後円墳で前方部は二段、後円部は二段ないし三段の段築を有すると推定した(福永編2008: pp.16~17)。ただし、この推定は墳丘西半の限られた範囲の調査成果に基づくものであった。

今回の調査では前方部前面の葺石基底石方向が確定できたことに加えて、墳丘東半の後円部ならびに前方部における葺石基底石の走行方向も、部分的に明らかにすることができた。そこで、これらの成果をふまえて再度、長尾山古墳の墳丘形態を復元してみよう。

まず、墳丘復元的前提となる墳丘主軸を今回の調査成果に基づき、次のように変更したい。前回は、情報が限られていたため、R1-S1軸を墳丘主軸と仮定して墳丘復元を進めていた。しかし、今回の調査で、①前方部前面葺石基底石方向がR1-S1軸直交方向より反時計回りに4度近くふれること、②西クビレ部2008調査区にて検出された前方部基底石走行方向がR1-S1軸に対して10度近く墳丘内側にふれること、が判明した。そこで、墳丘主軸をR1-S1軸より反時計回りに4度ふった軸で設定することとする。ただし、このように墳丘主軸を仮定しても西クビレ部2008調査区で検出された前方部基底石の走行方向は6度程度、墳丘内側に向くこととなる。ここで注意が必要なのは、前方部2008-2トレンチで検出された葺石基底石の走行方向である。検出幅は約1.5 mと短いものの、さきほどの西クビレ付近の前方部基底石走行方向とは逆に、R1-S1軸に対して13度近く墳丘外側にふれ、結果として西クビレ部のそれと線対称で比較すると、20度以上も基底石の走行方向が異なる。このような検出状況から推定するならば、前方部の形状は次の2つの可能性が想定できる。まず、前方部両側線が主軸に対して反時計回りに6度前後ふれた柄鏡状の形態である。この場合、前方

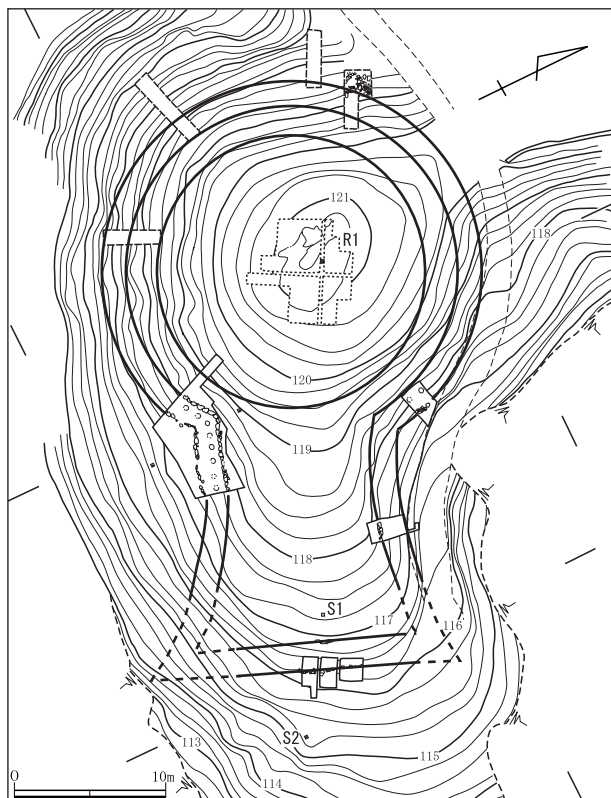


図9 墳丘形態の復元

部は主軸に対して斜行してしまう。もう一つは後円部から鈍角に屈曲し、墳丘内側に前方部基底石方向がのびた後、徐々に墳丘外側にラインが走行していくという形態である。ここでは後者の可能性を採り図9を作成した。このような屈曲をもつ前方部は、古墳時代前期でも前半に属する前方後円墳に認められる「バチ形」を呈する前方部と共通している。ただし、奈良県桜井市箸墓古墳をはじめとする「バチ形」の前方部を有する古墳の発掘調査例は思いのほか少なく、その詳細は不明である。このような現状で兵庫県たつの市養久山1号墳（近藤編1985）をはじめとする播磨や讃岐地域の前方後円墳、あるいは前方後円形の墳丘墓の調査では、長尾山古墳同様、前方部側面が前方部前面にむけてゆるやかに弧をえがきながら狭まり、再び弧線をえがきながら前面方向に広がっていく事例が

報告されている。出土した埴輪からも古墳時代前期前半に遡る可能性が高い長尾山古墳の前方部形態にみられる以上の特徴については、今後も検討を進めていく必要がある。

次に各地点で検出された葺石基底石等の高さに基づき、側面形態についても確認しておきたい。まず、昨年度の後円部第4トレンチでは標高118.3～118.7m付近より1段目の葺石起源とみられる礫群が、組み合わせざった状態で検出されている。後円部2008-1トレンチでは標高117.4m付近で1段目基底石が認められた。さらに西クビレ部2008調査区では後円部側標高117.2m、前方部側標高117.0mに1段目基底石が検出されている。そして、前方部前面では標高116.0～116.2mで1段目基底石が認められる。以上の成果をふまえるならば、墳裾高は後円部と前方部で最大1.5m近い比高差が形成されていたと推定できる。なお、1段目葺石は人頭大の扁平な角礫1・2石を直立に据え付けることにより、高さ0.3m程度の急角度の斜面を形成しているのが特徴的である。2段目斜面については西クビレ部2008調査区、前方部2008-2トレンチで検出されている。いずれの位置でも、人頭大の基底石が直立ぎみに据えられ、2段目斜面の傾斜角は45度をはかる急角度であった。扁平な石材を主に縦使いして斜面に貼り付けて基底石とし、急角度の立ち上がりを有する例については、淀川右岸から大阪湾北岸に展開していることがすでに指摘されており（廣瀬2008：p.160）、興味深い。

以上の検討の結果、長尾山古墳は前方部を南東にむけた墳長39mの前方後円墳に復元できる。後円部径は1段目基底で25m、2段目基底では22mをはかる。前方部長14mとなり、前方部長は後円部のおよそ3/5となる。ただし、今回の調査では後円部の3段目テラスの有無や前方部端の広がりを確認できておらず、これらの点が今後の課題として残るといえよう。（寺前）

### 第3章 出土遺物

今回の調査では、破片数にして約 6000 点の埴輪が出土した。小片が多いが、樹立状態を保って検出できたものもあり、昨年度に比べて良好な資料を得ることができたといえる。整理作業はなお継続中であるが、現在までに得られた所見の中で部位ごとの特徴を述べていきたい（図版 7・8）。

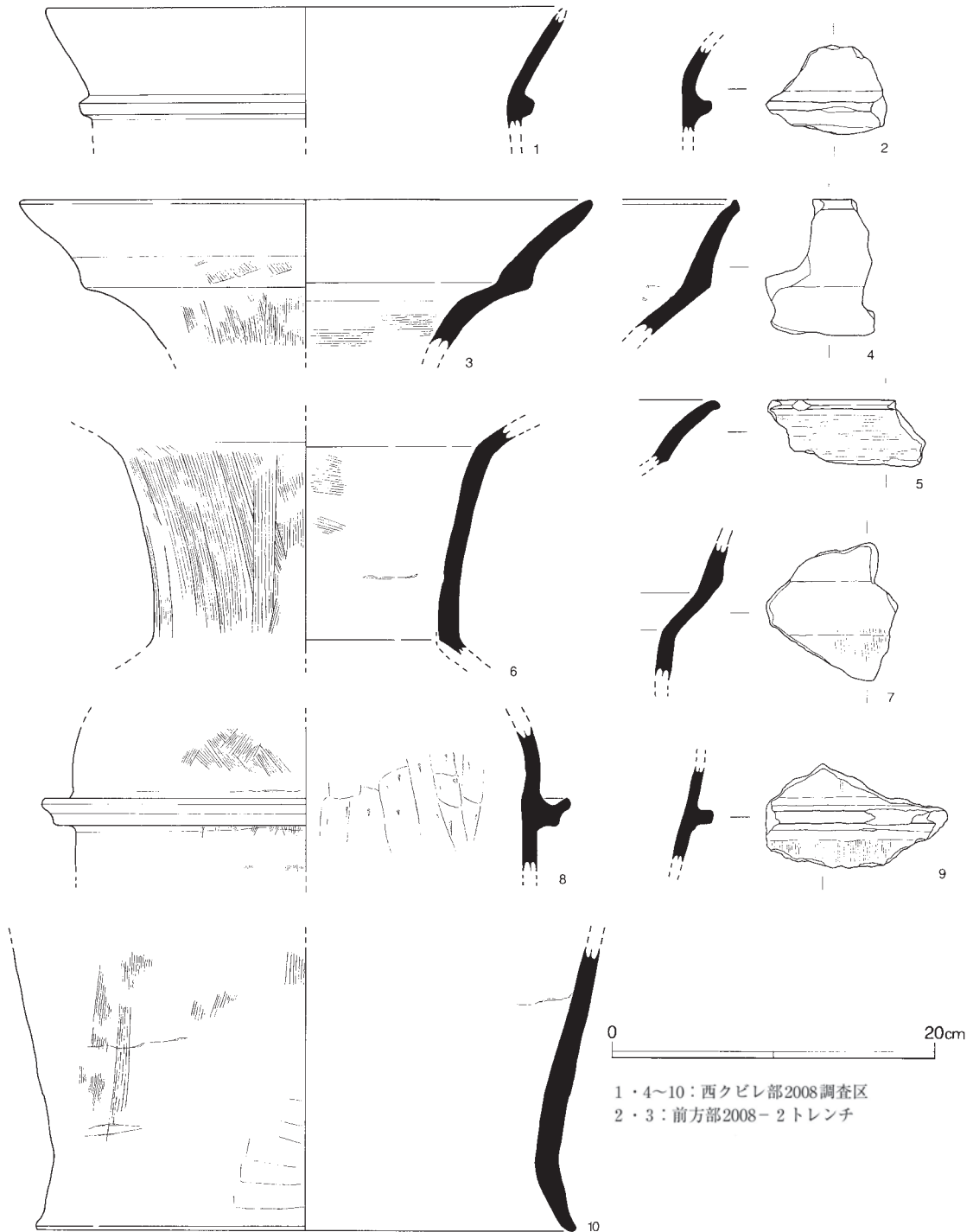


図 10 出土埴輪実測図



口縁部は普通円筒と朝顔形円筒の二種が出土している。普通円筒の口縁部は先端の形状が不明だが、最上段の突帯直上から外上方へ開く屈曲がはじまり、直線的にのびる。屈曲部の内面にゆるい稜をもつものともたないものが存在する（図10-1・2）。口径はおよそ32cmをはかり（1）、内外面ともに調整はヨコナデを施している。朝顔形円筒の二重口縁部は内面に明瞭な稜をもつものともたないものがあり、端部の形状もまるくおさめるものや内外につまみ出すものがあるなど、様々なバリエーションがみられる（3・4・5）。口径は35.2cmをはかり（3）、いずれの個体も基本的な調整は内外面ともにヨコナデを施すが、一部内面にハケやケズリといった調整も認められる。器台状を呈すると考えられる破片も存在するが、小片のためその部位を特定することはできない（7）。

朝顔形円筒の頸部も多く出土しており、その中から1点を図化した（6）。基部外径が19.0cmをはかり、内面に明瞭な稜をもつ基部から緩やかに斜め上方へのびた後、角度を変えてさらに外方へ屈曲する形状をもつ。内外面をハケで調整している。他にも形態、調整方法、法量において異なる頸部片があり、口縁部との相関関係については今後の課題である。

胴部は外面にタテハケ、内面にケズリ調整を施すものが多い。しかし、器壁の厚さは多様であり、その差が部位の違いに対応してくるかは今後検討していく必要がある。突帯は受口状のものと台形状を呈する通有のものがある。前者は朝顔形円筒の肩部へ続くもの（8）もあるが、全てがそうであるかは現状で判断できない。後者は貼り付け時の調整手法が多様であり、細かく分類を行うことが可能である。

底部の形状は、樹立状態で検出されたものの中にも様々な違いがある。ここでは図化したものの特徴を述べる（10）。この個体は底径33.4cm、厚さ1.5cm前後をはかり、接地面から若干内傾した後、外上方へのびていく形状である。内面調整は摩耗のため残存しないが、外面にはやや右方向に傾くタテハケや、板状工具でナデを施したような圧痕が確認できる。外面の赤彩は接地面付近にまで施されており、長尾山古墳の埴輪がどのように樹立されていたかを考える上で参考になる。現状で最下段突帯まで残存しているものは認められず、底部高は不明である。しかし、少なくとも30cmの高さまでは底部が続いていることが確認できている。また、流土中からも多くの底部片が検出されており、1段目テラスより上段においても埴輪が樹立されていた可能性が考えられる。

これらの埴輪にみられる次のような特徴、すなわち内面ケズリの多用や受口状突帯の存在、鱗付円筒埴輪の欠如という点から古墳時代前期前半の年代を与えることができる。しかし、多くの破片が出土しているにもかかわらず、突帯間隔や透孔形状のわかる個体が認められないことは、長尾山古墳に立て並べられた埴輪の特徴を反映しているとも考えられる。今後、全形の復元を慎重に行っていく。（金澤雄太）

## 第4章 調査のまとめ

長尾山古墳第2次調査では、墳丘の範囲・形態・時期などの確認がおもな課題であった。墳丘の範囲は、前方部については前方部2008-1トレンチにおいて1段目基底石を約4.4mにわたって検出することができ、これにより前端のラインがほぼ確定した。

後円部後端は、大阪大学による第1次調査の後円部第4トレンチにおいてややずり落ちた葺石群を検出しているため、ある程度の位置を復元的に推定できるが、原位置の基底石としてはとらえられていない。現在の山手台南公園から墳丘部に至る通路部分は、公園設置時に後円部斜面を埋めて造成されているので、この部分を掘削すれば本来の後円部裾部をとらえられる可能性はあるが、埋土が深いこともあって、果たせていない。現時点では、後円部2008-1トレンチと西クビレ部2008調査区で検出された1段目基底石、第1次調査の後円部第4トレンチ転落石群を通るような円周を想定して、およそ25mの後円部を復元するのがもっとも妥当であろう。これによれば墳丘長は39mとなる。

墳丘形態は、西クビレ部2008調査区において葺石基底石列が明瞭に検出されたので、前方後円墳と確定した。この調査区の一部を墳丘上方へと拡張した部分では、葺石は認められなかったものの、人為的な可能性のある地山の緩傾斜面を確認できた。調査区下方の転落石がきわめて多量であることからみて上方の葺石はすべて流出しているようであるが、この地山平坦面を2段目テラスの痕跡と考えれば、後円部は三段築成ということになる。前方部は前方部2008-1トレンチの所見からみても二段築成であることは確実なので、現時点では前方部二段、後円部三段という墳丘構造を推定しておきたい。後円部の段築構造や前方部の開きについてはなお不確実であり、さらに情報を得るための追加調査を行う必要があると考えられる。

このように、小規模ながらも二段以上に段成され、葺石、埴輪を施す長尾山古墳は、政権中枢の古墳づくりと共通する要素を持っているといえる。前期前半の範疇でとらえられる埴輪の特徴からすれば、長尾山古墳は猪名川流域で最初に築造された前方後円墳である可能性は高い。この地域で初期大和政権の葬送儀礼をいち早く採用した被葬者であることを意味しており、政権と猪名川流域との連携が長尾山古墳被葬者の活動をきっかけに4世紀初めには早くも成立していたと考えることができる。

第3次調査として大阪大学が実施した後円部墳頂部の平面精査では、墳丘主軸に斜交して南北方向に延びる狭長な小礫の広がりを検出した。今回は長さ4.5mにわたって確認したが、さらに調査区外に延びていくようである。また、この小礫を取り囲むような形で長さ5.5m以上、幅約3.6mの範囲に土質の異なる部分が認められた。発掘調査に先立って行った電気探査、レーダー探査においても異なる反応を示す部分が南北方向に延びるという所見が得られているので、この土質の異なる範囲が墓坑内である可能性もある。そうすると小礫については、埋葬終了時に墳頂部を覆っていた礫層が埋葬施設の腐朽に伴って陥没し、後世の削平を免れて残存したと理解することもできる。今年度は樹木保護との兼ね合いで発掘区の制約があったために、これら小礫や土質の違いの意味を確定するには至らなかったが、樹木を移植するなどして来年度以降にあらためて追求していきたい。なお、1969年の

測量調査時に指摘されていた墳頂部の「粘土礫」は、当時の記述のような状況では確認できなかった。ただ、位置的には小礫範囲に近いと思われるのでなお精査が必要である。

今回の長尾山古墳第2次・第3次調査は、市教委と大学が共同で文化財の保存活用・研究に取り組んだという点で、文化財行政の可能性を探るテストケースにもなった。今後も、双方のメリットを生かしつつ、協力して事業を継続していく所存である。 (福永・直宮)

#### 参考文献

- 石野博信 1986 「回想・宝塚市長尾山の古墳調査」『市史研究紀要たからづか』 3、宝塚市史編集室
- 近藤義郎編 1985 『養久山墳墓群』兵庫県揖保川町教育委員会
- 櫃本誠一 1971 「長尾山古墳外形測量調査報告」『兵庫県埋蔵文化財調査集報』第1集、兵庫県教育委員会
- 橋本 久 1975 「第3章第2節 古墳は語る」『宝塚市史』第1巻、宝塚市
- 廣瀬 寛 2008 「葺石の成立・展開と地域間交流」『吾々の考古学』和田晴吾先生還暦記念論集刊行会
- 福永伸哉 2004 「畿内北部地域における前方後円墳の展開と消滅過程」『西日本における前方後円墳消滅過程の比較研究』平成13～15年度科学研究費補助金基盤研究(B)(1)研究成果報告書、大阪大学大学院文学研究科
- 福永伸哉編 2008 『長尾山古墳第1次発掘調査概報』大阪大学文学研究科考古学研究室
- 直宮憲一編 2007 『国指定史跡中山荘園古墳保存整備事業報告書』宝塚市教育委員会
- 柳本照男ほか 2005 「古墳時代」『新修豊中市史』考古、豊中市史編さん委員会
- 森岡秀人・吉村健 1992 「摂津」『前方後円墳集成』近畿編、山川出版社
- 森本 徹 1992 『山本奥古墳群 C支群・H支群発掘調査報告書』山本奥古墳群調査団・奈良大学考古学研究室

# 圖 版





1 長尾山古墳の立地（中央山塊頂部、南から）



2 前方部前面付近の現状（東から）



図版 2



1 前方部 2008 - 1 トレンチ全景 (南東から)

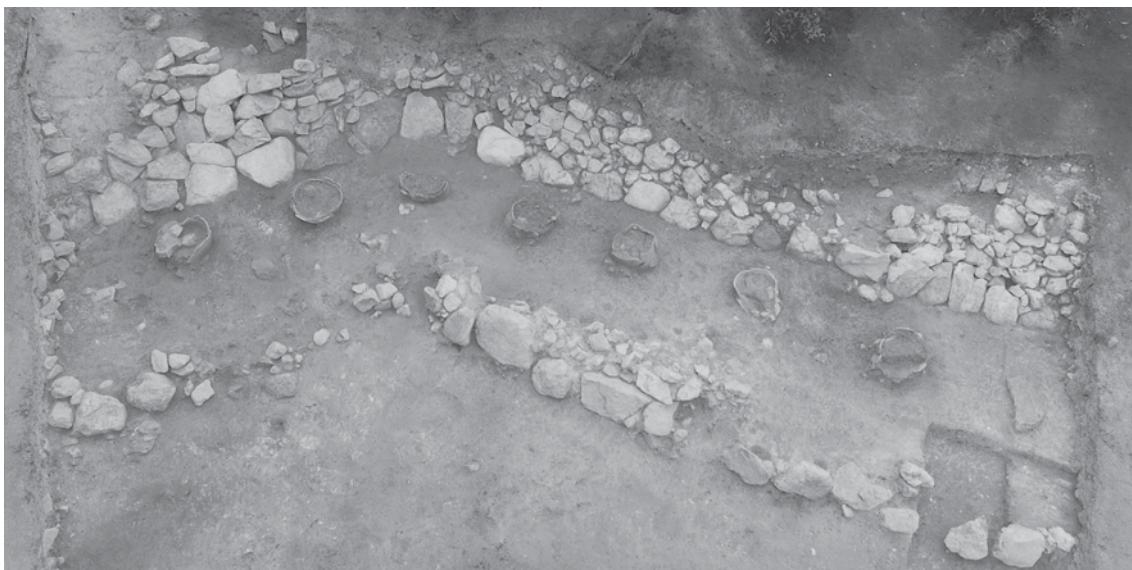


2 同 (南から)





1 西クビレ部 2008 調査区全景 (東から)



2 同 (南から)



図版 4



1 西クビレ部 2008 調査区全景 (南東から)



2 西クビレ部 2008 調査区における埴輪列検出状況 (東から)





1 前方部 2008 - 2 トレンチ全景 (北から)



2 前方部 2008 - 2 トレンチ 2 段目葺石 (北から)



3 同 (北西から)

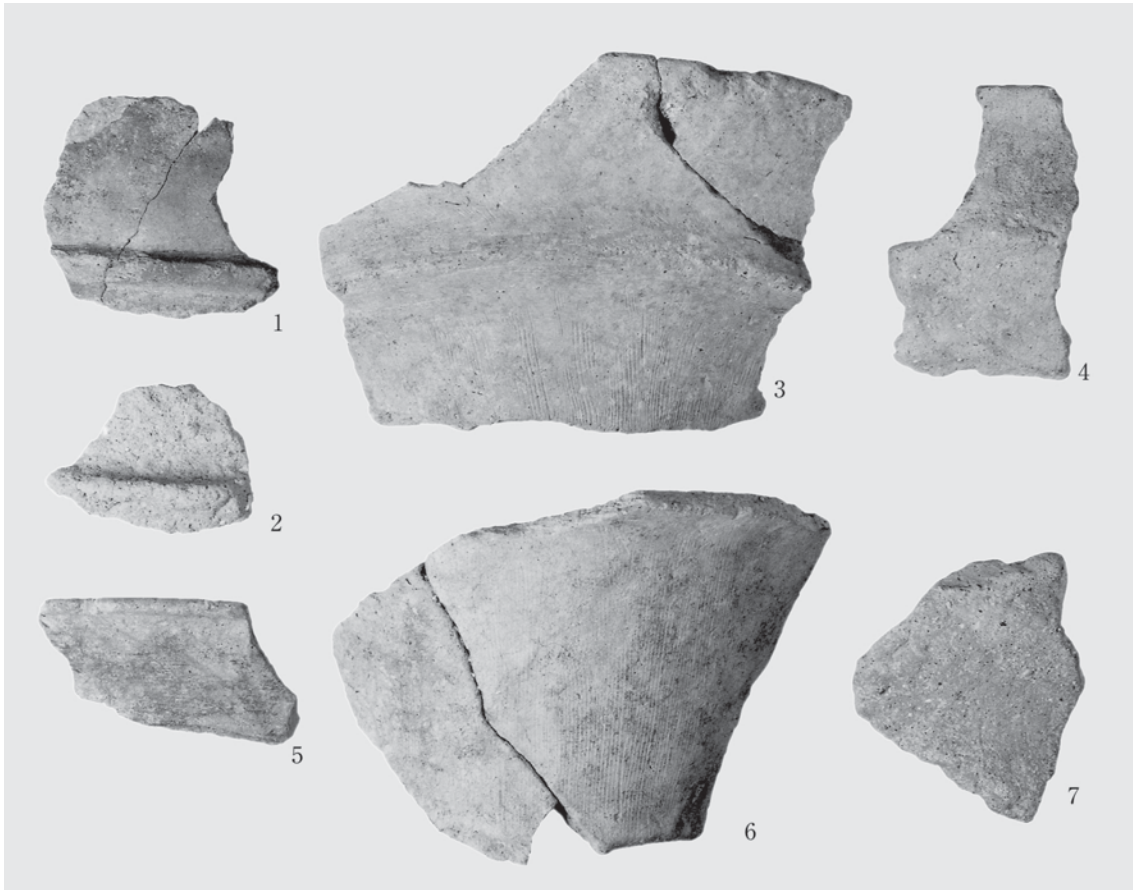




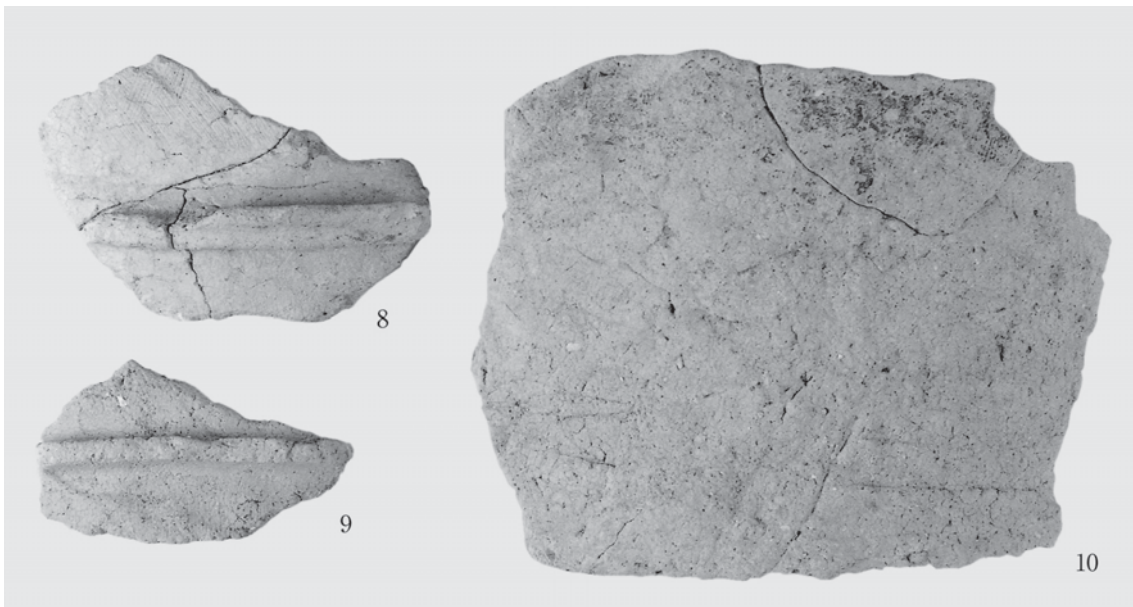
1 後円部 2008 - 1 トレンチ全景 (東から)



2 後円部 2008 - 1 トレンチ 1段目葺石と埴輪 (東から)      3 同 (東から)



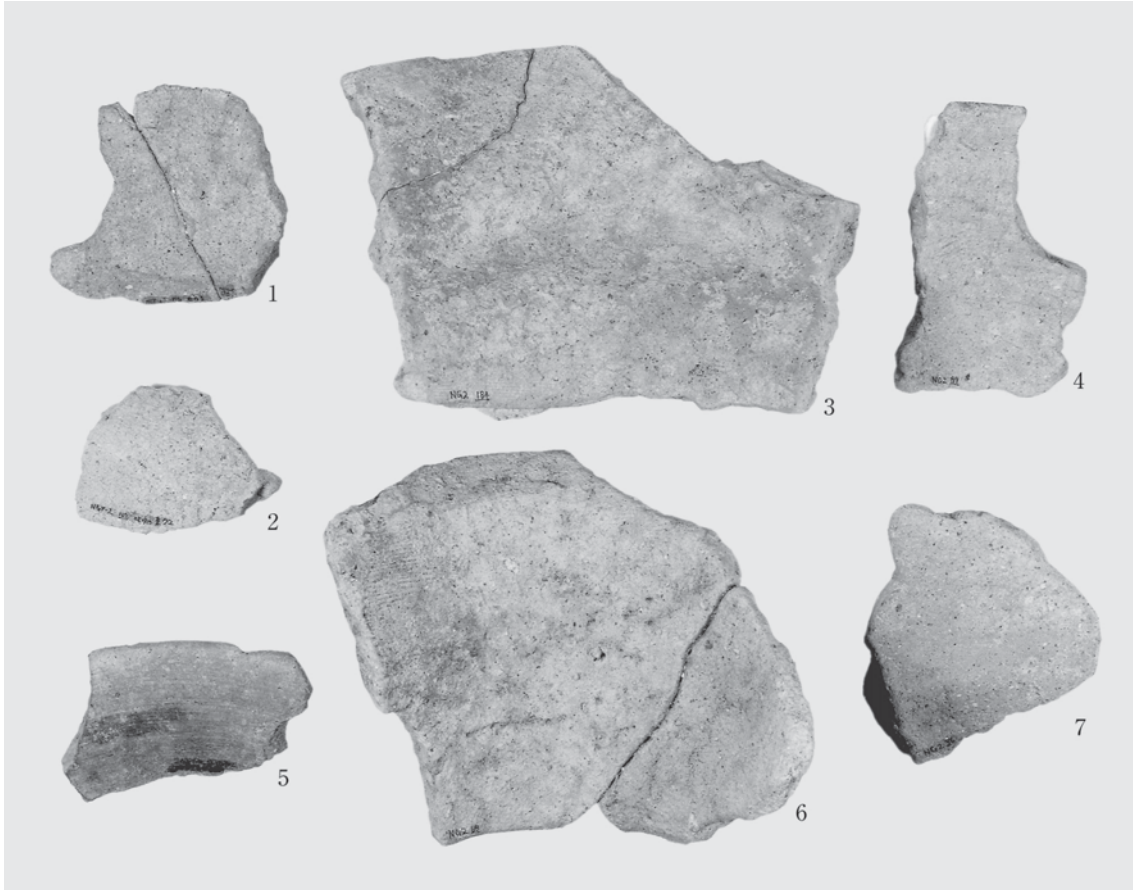
1 埴輪（口縁部・頸部）外面



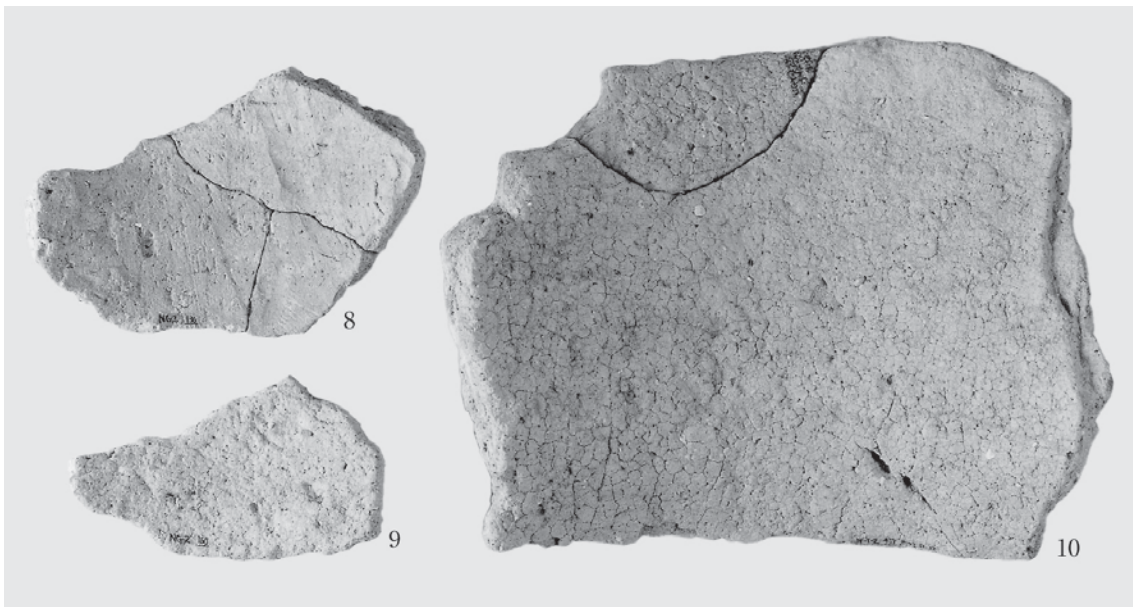
2 埴輪（胴部・底部）外面



図版 8



1 埴輪（口縁部・頸部）内面



2 埴輪（胴部・底部）内面

ふりがな	ながおやまこふん だいにじ・だいさんじはくつちようさがいほう				
書名	長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報				
副書名					
編著者名	福永伸哉、直宮憲一、寺前直人、中久保辰夫、酒井将史、前田俊雄、野島智実、金澤雄太、森暢郎（編集：福永伸哉）				
発行機関	大阪大学文学研究科考古学研究室				
所在地	〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5				
所収遺跡名	所在地			コード	
長尾山古墳	兵庫県宝塚市山手台東1丁目4-424			市町村	遺跡番号
				28214	40
北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
34度49分32秒	135度23分04秒	20080827～ 20080928	2次調査 (宝塚市教育委員会:41㎡) 3次調査(大阪大学文学研究 科考古学研究室:30㎡)	範囲確認 調査 学術調査	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
長尾山古墳	古墳	古墳時代	古墳葺石 テラス面 円筒埴輪列	埴輪・土師器	葺石、段築、埴輪列を有する4世紀に遡る後円部径25m、墳長39mの前方後円墳であることが判明した。後円部墳頂ではレーダー探査等を実施し、平面を精査した結果、墓坑の可能性のある土質の違いを確認した。

---

長尾山古墳第2次・第3次発掘調査概報

2009年3月発行

編集 大阪大学文学研究科考古学研究室

(代表 福永伸哉)

発行 大阪大学文学研究科考古学研究室

〒560-8532 大阪府豊中市待兼山町1-5

印刷 有限会社 ワイキューブ

〒665-0051 兵庫県宝塚市高司4-3-28

---